

新聞を活用した主権者教育と歴史学習

指定校二年次 長野県長野西高等学校中条校 地歴公民科 田村 直洋

(1) 本校の新聞活用（NIE）の現状

本校は全校で67人、各学年1クラスずつの小規模校で、平成21年からは長野西高校の地域キャンパス校となり、平成30年で10年目を迎える。小中学校の学び直しを行う科目「ベーシック」や、中条地区住民運動会全校参加などの地域との交流を大切にしている点が特徴である。

小規模校のため地歴公民科目は一人の教員で全学年の授業を担当している。日頃から新聞を読んでいる生徒は多くなく、社会情勢やニュースも、テレビやインターネットなどで触れる程度である。指定校2年目となる今年度も昨年度に引き続き、各学年の授業でそれぞれの科目の内容に合わせて新聞を活用すること、8月に行われた長野県知事選を題材に主権者教育を実施した。また、新聞を活用した情報発信はできないかと考え、異文化交流を題材に記事を書く、という取り組みを行った。

(2) 実践のねらい（育てたい力）

本校生徒の実態を踏まえ、昨年度に引き続き以下の3点と、新たに4点目を設定した。

- ①新聞というメディアに触れさせる機会を設け、様々なメディアの中から情報を取捨選択する能力（メディア=リテラシー）を養う。
- ②自身の望む社会をつくるための一手段としての選挙の役割を理解する。
- ③他者と意見を交わしていく中で、世の中には多様な考え方があることを理解し、そうした様々な意見や考え方をまとめて創り上げられるのが私たちの社会だと気づく。
- ④自身の考えをまとめ、他者にわかるように伝える能力を養う。

(3) 研究の概要

①各学年の授業で新聞記事の紹介【通年】

各学年の地歴公民の授業（1年：現代社会、2年：世界史B、3年：日本史B）の際に、その日のニュースに触れるなどして、新聞を意識させるようにした。現代社会は世界情勢やニュースなどを毎回の授業の導入として話題にし、世界史B・日本史Bでは紙面のニュース・出来事の歴史的背景について触れるなどしてから授業を始めた。

②地域史(3年選択)の授業での活用【通年】

学校設定科目として地域の歴史を研究する科目があり、各生徒の興味関心をもとにレポート作成・プレゼンを行った。情報収集を行う際に、インターネットや書籍だけでなく、新聞を活用した。

③主権者教育(全校)【6時間】

長野県知事選が平成30年8月5日(日)に実施されたことに合わせ、各候補者について調査・意見交換を行い、模擬投票と投票結果の考察を行った。

i) **事前学習1**：民主主義制度や選挙制度、長野県の課題などを学ぶ。

- ①民主主義・選挙制度について
- ②長野県の課題や生徒の希望・要望→話し合い

ii) **事前学習2**：県知事選に向けて、各候補の政策や思いなどを新聞・インターネットなどを用いて調べる。

- ③政策・思いなどについて調査・まとめ(インターネット)
- ④政策・思いなどについて調査・まとめ(新聞&書籍)
- ⑤マニフェストスイッチの提示→話し合い・アンケート記入(投票理由など)

iii) **模擬投票**：3年(木)14:40～防災訓練終了後、体育館にて

- ⑥振り返り：本校の投票結果と、実際の投票結果を比較・検討する。各候補の当落のみならず、どういった観点で投票したか、どういった政策を重視したかなどを考察

2018年長野県知事選挙模擬投票投票結果@長野西高校中条校

●立候補者数2 有権者数67人 投票者数66人 投票率98.5%

	阿部 守一	金井 忠一	白票 無効票	欠席	合計
3年	15	13			28
2年(教養)	2	10			12
2年(進学)	8	2			10
1年	7	9		1	17
計	32	34	0	1	67

得票率 48.5% 51.5% 0.0%

※実際の投票結果(信濃毎日新聞第1面(8月6日朝刊)より)

有権者数1,739,481人(男842,786人、女896,695人)

投票率 43.28%(男42.97%、女43.56%)

当選

阿部 守一

57歳 無所属 現③
推薦：自民・立憲民主・国民民主・公明・社民党

635,365
得票率85.14%

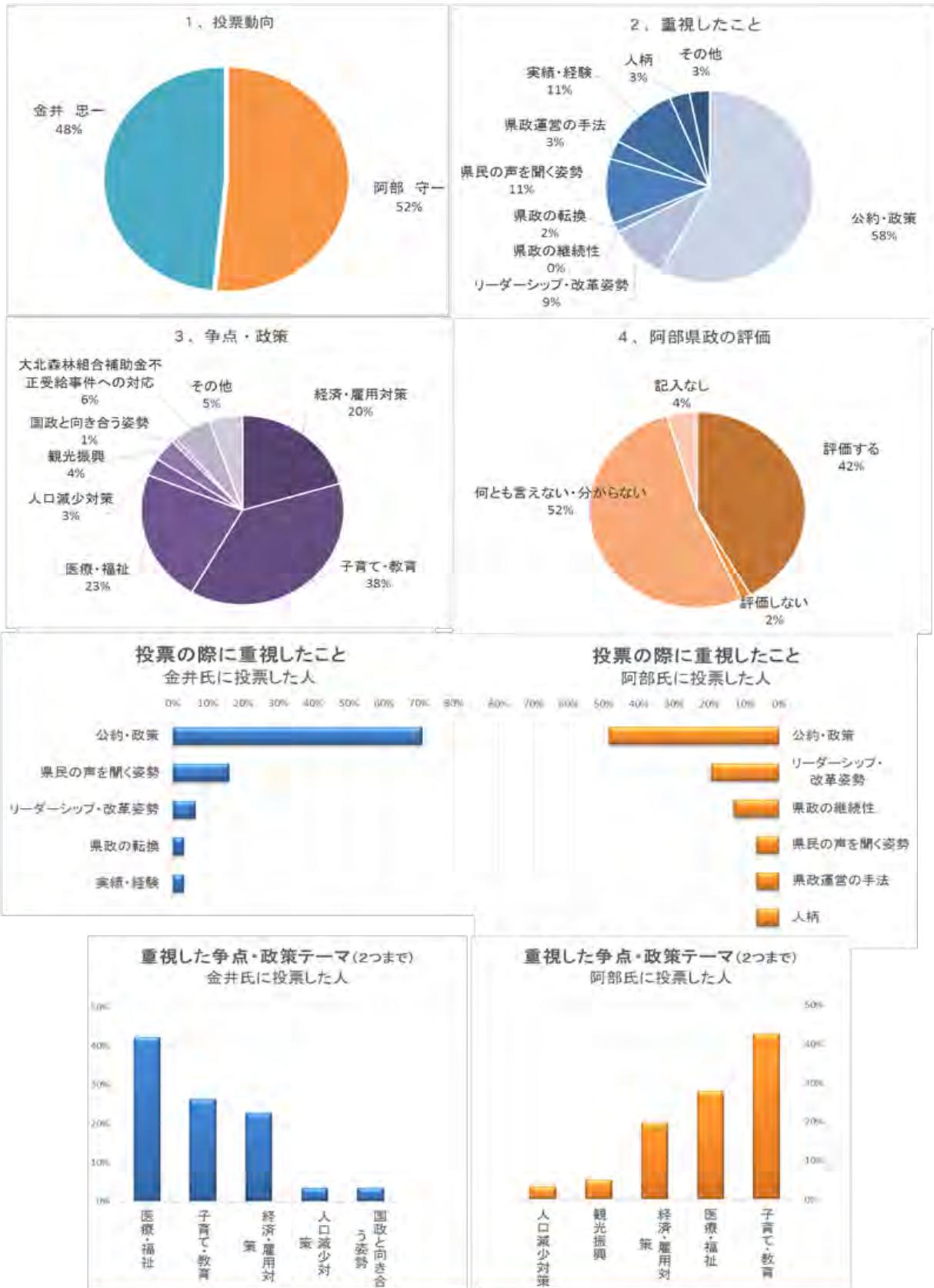
金井 忠一

68歳 無所属 新
推薦：共産党

110,930
得票率14.86%

模擬投票後に実施したアンケートの集計結果（他に学年ごとの集計も行った）

●全校（投票動向では阿部氏が勝利したように見えるが、アンケート記入の誤りによるものである）



④日本史B(3年全員)【6時間】

日本史Bの一単元「開国と幕府の滅亡」の学習にからめ、当時の日本人に開国というものがどういう影響を与えたか、異国の文化と交流することがどんなものかを実感するための一手段として、新聞を活用した。具体的には、中条地区に短期滞在している外国人アーティスト*へのインタビューを行い、それについての記事をまとめた。インタビューと記事作成にあたり、信濃毎日新聞の記者の方に出前授業をしていただいた。

i) 記事作成のための情報収集

- ①信濃毎日新聞社による出前授業（インタビューの仕方）
- ②インタビューの英訳（事前に各自で質問を準備し、英語科と連携）
- ③外国人アーティストへのインタビュー（英語科と連携）

ii) 記事作成

- ④信濃毎日新聞社による出前授業（記事の書き方）→記事作成
- ⑤級友との記事の比較とその考察、記事の再作成 ※研究授業
- ⑥まとめ

※外国人アーティストについて

交流から着想 アートに

長野・中条 外国人芸術家が滞在



長野市中条地区で、芸術家が約2カ月半滞在し、住民と交流しながら制作活動をする本年度の「アーティスト・イン・レジデンス」が始まった。今回は染色作家でオーストラリア出身のメリンダ・ヒールさん(31)と、ともに映像作家でセルビア出身のミハイロ・ジエティックさん(39)、エレナ・クルネタさん(39)の2組、計3人を迎える。5日夕、地元の中条公民館で歓迎会があった。

来月 体験型講習会も

「植物題材に」生活映したい」

市が2016年度に始め、ストリアの自分の故郷と比べて山がとて高い。知らない植物を見つけて題材にした」と話している。

ジエティックさんとクルネタさんは中条の生活や風景を題材にしたドキュメンタリー映像を共同で制作する。ジエティックさんは「言葉が伝わらない分、身ぶりや表情などに注意深くなる。外国人の目から見た中条の生活を映したい」と話した。

歓迎会には地元住民約40人が集まった。事業には新しい視点で地域の魅力を発掘してもらおう狙いもある。農業の上條直光さん(70)は「地域に新しい風を吹かせてくれる。どんな作品ができるか楽しみにしている」と話していた。

中条地区での滞在を始めた(奥の右から)ヒールさん、クルネタさん、ジエティックさん

市が2016年度に始め、3回目。本年度は6組の応募があり、2組を選んだ。中条地区の教員住宅に11月まで滞在し、豊かな自然や素朴な生活から着想を得よう。3人は10月に市民向けのワークショップ(体験型講習会)を開くほか、市美術館などで作品の展示を行う。

ヒールさんは京都精華大で友禪染などの技術を学んだ。絹や麻布に自然の染料を使って染め付けた作品を構想しているという。「中条は、オ

⑤研究授業

i) 学級・単元目標など 学級：日本史B（3年全員）

単元：開国と幕府の滅亡（外国のアーティストとの交流を通して学ぶ開国）

単元目標：以下の目標を達成するために、新聞活用を試みた。

A 開国による急激な外国文化の流入が、日本文化へ大きな揺さぶりをかけたことに気付かせる。

B 自国文化の相対化には、外国文化への理解が必要であることに気付かせる。

C 自己の意見をまとめたり、インタビューを通して記事を書いたりする力を養成する。
また、そうした活動を通して、歴史（史料）とは事実をありのまま記したのではなく、記述者のバイアスがかかることに気付かせる。

本時の目標：以下の2点を意識して授業を行った。

a どういう記事を書いたら読み手に伝わるか意識しながら、班ごとに記事を完成させる。また、完成させた記事を発表しあう。

b 外国のアーティストが考える「中条のよいところ」を受けて、各自が「中条のよいところ」を考える。

ii) 授業の様子

段階	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意事項 評価の観点・方法
導入	5分	「森林の日」の記事紹介	自分たちの活動がすべて正しく記述されているか→すべてはムリ ※どういった記事を書くべきか考えさせる	
展開	30分	グループ毎で記事作成	特に以下の点について考察 ・記事のテーマについて ・なぜそのテーマにしたのか ・自分たちの思いを伝えるにはどんな書き方が必要か ・中条のよい点について外国のアーティストは何というか	相手を否定したりしないよう注意する
整理	10分 5分	グループ毎で発表 まとめ		

導入として、中条校の行事のひとつである「森林の日」についての新聞記事を読み、どのように自分たちの活動が紙面に紹介されているかを確認した。「私のコメントないなあ」「俺の写真撮ってたけど載ってない」といった声が多く聞こえ、記事に書かれた内容は記者による取捨選択が行われている、ということが実感できたようだった。

次に、グループごとに前回作成した各自のインタビュー記事を発表しあい、級友の記事を参考にしながら新しい記事を作成させた。このとき、なぜその部分を記事にしたのかを説明したり質問したりしながら進めた。なぜ中条に来たのか、なぜアーティストになったのかといったことだけでなく、どのコンビニのコーヒーが好きか、という面白い記事を書いてきた生徒もい

た。イラストや染色の専門学校への進学を考えている生徒は、創作活動をするうえで気を付けていることは何か、という記事を書いてくるなど、それぞれが自身の興味を持った点について楽しみながら記事を書いてきていた。

最後に、班ごとでまとめた記事を発表した。各生徒が個性あふれる記事を書いてきており、それらを参考にしながらより面白い記事に仕上がった班もあったが、多くの班で班員の記事やテーマを上手くまとめきれず、新しい記事を完成する、という段階まで行かなかった。複数の人間が書いた記事をまとめるということは非常に難しいので、この作業は不要だったと思われる。

iii) 授業の成果・反省

研究授業の本時の目標として掲げた a,b については、ある程度達成できたように思う。とくに b の「中条のよいところ」については、それまで生徒たちが漠然と感じていた「自然が豊か」「地域の人々との交流が多い」といった部分が、外国人アーティストの方々の口からも聞こえてきたことで、強く実感していたようである。

単元目標全体に目を向けると、日本史の授業として A~C という課題を掲げてとりくんだものの、達成度はいまひとつであった。原因としては、授業の進め方や資料の提示の仕方があまりよくなかったことが挙げられる。生徒たちは、インタビューや記事作成自体は楽しんで取り組んでいたものの、「なぜ日本史でこんなことをやっているのだろう」という疑問を常に持っていたようである。伝えたいテーマや身につけさせたい技能・考えを、もっと精査して授業をすべきであった。多くの生徒にとっては、インタビューをして楽しかった、という授業になってしまい残念である。それでも、生徒の中には、級友の記事を上手く活用しながら自身の記事をより良く仕上げた者、この取り組みで得た感情を幕末の日本人も感じていたのではないかと想像する者などもおり、テーマの設定や授業の進め方さえうまくはまれば、NIE は生徒にとって非常に有益な学習になると実感した。

(4) 研究のまとめ

二年間の研究の中心は、二年続けて取り組んだ主権者教育と、今年度取り組んだ異文化交流の二つであった。したがって、この二つについてまとめていきたい。

①主権者教育

当初授業を始めたころは生徒たちの興味関心が低く、「18 歳になっても選挙に行かない」と言っている生徒もいた。だが、授業を進めていくうちに、自身にとって身近な問題だという自覚が出てきて、熱心に取り組む姿が見られるようになった。一年目は市長選、二年目には県知事選と、イメージする範囲が徐々に広域になっていったことも段階的な学習の手助けとなったと思う。

授業を進めていって驚いたのは、生徒たちの学習へ取り組む姿勢である。選挙に無関心であった生徒たちも両候補者について調べていくうちに、通学費用や子育てなど、自身の身の回りのことが選挙によって変えられるかもしれない、という意識を持つようになっていった。本校のアンケート結果を見ると、各生徒が様々な要望を持っており、6 人程度のグループ毎で意見を出し合ったときに互いの考えを聞いてさらに自身の考察を深めている姿があった。

早稲田大学マニフェスト研究所が行っているプロジェクトである、「マニフェストスイッチ」を活用させていただくことができた。各候補者にマニフェストの共通フォーマットを提案し、わかりやすく見やすい形で政策を公開・活用するというマニフェスト・スイッチは、生徒たちのみ

ならず我々にもわかりやすいものであった。二年目には県内の複数の高校が信濃毎日新聞社と連携して、マニフェストスイッチを活用した模擬投票を実施し、その投票結果を比較・考察するといったことも実施した。

②異文化交流

主権者教育は「新聞で学ぶ」「新聞を学ぶ」という視点での学習であったが、「新聞をつくる」（＝自身の考えを他者に伝える）という視点での学習を考えた際に、異文化交流を通しての実践授業に注目して取り組んだ。しかし、生徒の多くが「なぜ日本史の授業で外国人にインタビューをするのだろう」「ホームルームでやる内容ではないか」という疑問を持っており、授業担当者の掲げた単元目標が達成できた生徒は少数であった。これは、担当者の授業展開や提示の仕方がよくないため、授業後の研究会でも様々なご指摘をいただいた。研究授業の成果・反省の項目でも書いたが、もう少しテーマを絞ったり、授業の進め方を工夫すべきであった。

また、こうした取り組みを信濃毎日新聞紙上で何度も取り上げていただいたことで、普段新聞に興味を持たなかった生徒たちが新聞に興味を持つようになった。親族から新聞に載っていることを褒められ、前向きに学習に取り組む生徒も多かった。生徒が自ら学習する一手段として、新聞は非常に有効であると感じた。

(5) 残された課題

- ・新聞を活用する、ということが手段ではなく目的になってしまいがちであった。主権者教育のように、候補者についてまとめられた記事を比較して模擬投票、のように流れがある程度イメージできる学習に関しては、新聞を手段として活用できた。だが、2年目に実施した異文化交流は、外国人アーティストが地域の学校との交流を希望している、ということを知って「NIEに使えるかもしれない」と考えたことがスタートになっていたため、テーマや目標の後付け感がぬぐえず、それが結果として生徒に授業への疑問を持たせることにつながってしまった。「新聞を使った授業をやらなければいけないからこういうことをやってみよう」ではなく、「この力を身に付けさせるために新聞を使ってみよう」という姿勢が大切だと痛感した。
- ・もっと全校の職員が気軽に新聞を活用できるように工夫してもよかったと思う。NIEというところでも「面倒だ」とか「やりたい教員がやればいい」というものになりがちだが、担当していない職員でも気軽に新聞を活用できるようにするのが望ましい。また、研究指定校になったから新聞を活用するのではなく、指定校終了後にも継続してNIEに取り組んでいくことが重要だと感じた。